

沖縄、複相性、グローバル化

升 信夫

1. 沖縄に関心を向ける理由

沖縄出身でもなく、沖縄を研究対象とするのでもない筆者が、ここで沖縄について文章を書くのは、沖縄を手がかりとして、自己、日本、世界などを見る新たな視座を得ることができるのではないかと考えたことを端緒としている。たとえば少子高齢化社会に伴う切実な問題は地方から生じつつあり、首都圏に視野を限定しては其の深刻さは実感として捉えにくい。とはいえ、そうした姿勢では、対象は目的ではなく手段として扱われがちであり、対象とされる側からの批判を受けることもある。実際、沖縄に生まれ育った人たちの手による書物に散見されることの一つは、ヤマト（日本本土）の人間は、差別者であり、抑圧者であるという、ヤマトへの批判意識であり、そうした告発の意識からすると、「沖縄を学ぶことは、日本を知ること」という設定も、差別、抑圧の意識構造に由来すると断罪されてしまうのである¹。ただ、かつて国場幸太郎は、『沖縄の歩み』冒頭に次のように記した。

「沖縄を見る目は、日本を見る目をするどくすると、よくいわれます。沖縄の歴史を知ることは、沖縄の現実を理解し、沖縄の将来を考えるのに必要なだけではありません。それは、また、日本の真実の姿に照明をあて、日本の前途を考えるためにも必要なことです。」²

国場幸太郎は、島ぐるみ闘争を舞台裏で支えながら、人民党内で瀬長亀治

郎と対立し、遂には沖縄を追われ、その後は宮崎で主として教員として過ごしながらか沖縄についての研究を継続した人物である。彼ほどの人³が、沖縄について知ることの重要性を、本土の人を念頭に置いて、説いていることは意義深い。この言葉を励みとしつつ、本稿は、沖縄についての言説の複相性、本土の人たちと沖縄の人たちとの意識の違いなどについて検討してゆく。その際、「沖縄問題を自分自身の問題としてとらえようとする発想」を大切に、「沖縄問題の解決自体を目的とせず、何か他の目的の為に利用する」⁴ ことのないよう留意したい。

なお、本稿は 2019 年 2 月の沖縄での桐蔭法学研究会報告を土台としているが、研究会では「グローバル化と沖縄」として前者のグローバル化に力点を置いた。本稿はそれと異なり後者の沖縄に焦点をあてている。

2. 多様なディスコースの存在

沖縄生まれではない多くの人たちが、沖縄について語ってきている。柳田国男、大江健三郎、木下順二、中野好夫、岡本太郎、谷川健一等々。もちろん、沖縄の人たち自身による言説はこれとはくらべものとならず多い。彼らは沖縄が日本に組み入れられて以来、沖縄とヤマトの関係性について常に意識し、様々な語りを紡いできた。そして沖縄の人々、本土の人々による言説の過程は、今なお、継続している。そうした沖縄を巡る言説に触れて思うのは、その複相性である。沖縄を題材とした書などに触れていると、多様な言説の森に迷い込み、方向感覚を失ってしまう感覚にとらわれる。複相的な言説の幾つかを確認してみよう。

青い空、青い海という自然環境に即した言説を用いれば、癒しの島といった像が結ばれる⁵。テレビドラマ「ちゅらさん」(2001 年)、映画「ナヴィの恋」(1999 年)などで描かれてきたのは、そうしたオリエンタリズムに傾斜した沖縄の姿であった⁶。後者では、老人、老女の時を超えた恋の物語が、人々の優しさを交えつつ描かれているが、これほどまでに優しい映画はないという印象を持つ人もいる。三線、沖縄民謡、エイサー、沖縄舞踊などの沖

縄独特の芸能もそうした印象を補強する。そして確かに、首都圏には見られない強い光、輝く青、海の湿気を含む空気は、心の再生を促してくれるかのようである。とはいえそうしたイメージが確立するのは復帰後20年ほど経過してからであり、それらより前の、「オキナワの少年」(1983年)や「ウンタマギルー」(1989年)などの映像を見る限り、強い光は、決して楽天的な南国世界を映し出していたわけではない。あるいは、映像作品と沖縄との関係というと、ウルトラマンを生んだ一人である金城哲夫の名前が浮かぶ。沖縄で幼年期を過ごし、東京で高校生活、大学生活を送った金城が描くSF世界は、独特の想像力に支えられている¹⁷。復帰直後の沖縄に帰郷し、海洋博の開会式、閉会式なども手がけた金城が試みたのは、本土の世界と沖縄世界とを架橋することであった。だがその2つの世界は、東京で過ごした1954年からの20年弱の世界と、1952年からはじまる沖縄米軍支配の20年という、全く対照的で明暗の分かれる世界であり、金城がその架橋を納得できる形で果たすことは叶わなかった¹⁸。

沖縄では、生活の苦しさ、貧しさも沖縄戦以来、継続してきた。沖縄についての著述には、随所にそうした貧しさについての表現がある。大江健三郎『沖縄ノート』の冒頭は、「大家族が生き延びるために四反の田畑を売ってその八倍の荒地地を買い求め、過酷な労働を重ね野菜栽培にわずか活路を見いだした農民」¹⁹について語られている。あるいは、戦後の精糖労働については、「精糖労働者達の95%は未組織で、残業代ももらえず、契約も一ヶ月ごとという臨時工が9割以上である」とされ、また「基地とは独立した農民や漁民は、沖縄における最下層社会を形成していて、言語に絶する窮乏下にある」¹⁰と報告されている。復帰後も、そうした状況が目に見えて著しく改善したとはいええない。沖縄出身の有名歌手について、「昼は保母、夜はスナックで働く母と、兄妹の四人家族で三畳と四畳半のアパートで暮らしていた」「彼女はアパートとからアクターズスクールに通う往復のバス代の260円にもことかき、片道1時間半の道を歩いて通った」¹¹という記述もある。

米軍基地についての記述は、沖縄戦と並び、沖縄についての記述の双壁をなす。そして、沖縄について、これほど多くのことが語られてきた根底には基地問題があるといってよい。たとば、植民地化ということがしばしば論じ

られるが、基地問題がなければ、植民地化について、沖縄と他の周辺の地域との間に質的な違いを見いだすことは難しくなるだろう。

沖縄の米軍基地の拡大は、52 年に発効した講和条約第 3 条で変則的アメリカ統治に沖縄が置かれて以来、国際情勢の変化とも絡んで、急速に進んだ。日本国憲法の下にもなく、アメリカ憲法の保護もない状態で、沖縄はアメリカ軍の統治下に置かれ、近代的自由権の要の 1 つである土地所有権も顧みられず、銃剣とブルドーザーで多くの農地が基地建設のために奪われた。また基地が完成し、機能し始めると、兵員による様々な人権侵害が日常化する。伊江島、伊佐浜で土地が強制接収された経過、またそれに反対する人々に拉致拷問などの弾圧が加えられた様子は、先に挙げた国場幸太郎『沖縄の歩み』に緊迫感をもって紹介されている。

沖縄の基地について考える時に避けて通ることができないのは、本土との基地バランスである。新崎によれば¹²、「1952 年の日米安保条約発効時点で、日本本土には沖縄の約 8 倍の米軍基地が存在し」たが、岸・アイゼンハワー共同声明により、一切の地上戦闘部隊を日本から撤退させることが明らかにされ、「日本から撤退する海兵隊などの地上戦闘部隊は「日本ではない沖縄」に移駐することになった。」そして、「改訂安保条約が成立した 1960 年日本の米軍基地は 52 年段階の 4 分の 1 に減少し、沖縄の米軍基地は 2 倍に増え」、「その結果、60 年代には国土面積の 99.4 パーセントの日本と 0.6 パーセントの沖縄に同一規模の米軍基地が存在することになった。」沖縄返還を間に挟む数年間で本土の米軍基地は約 3 分の 1 に減少したのに対して、沖縄の基地は殆ど減らなかったのである。こうした過程からは、本土の米軍基地が沖縄に押しつけられたという解釈が導かれよう。

ただ、その基地についての記述も、経済関係の言説では、人権侵害とは異なった形に描かれることになる。つまり、戦争で壊滅した沖縄経済は基地建設を通じて回復基調をたどったと肯定的側面が指摘され、「基地を中心にして経済が組み立てられそこに人々の働く機会や所得を得る機会が生まれ」、「戦後沖縄は、基地を始発的要因として形成された」とされるのである¹³。この観点からは、「基地は、歴史的に見ると戦後沖縄を作ってきた必要不可欠な要素として重く存在してきたものであり、その現実を多面的に見てゆく努力をしなければ基地の問題は正確にはわからない」ということになる¹⁴。

そうした基地の経済的な側面を見てゆくと、近年日本政府から基地関連で支払われている金銭についての記述にたどり着く。「5基地の従業員は3881名、地主数は、10821人、借地料は年間223億円」「借地料は嘉手納は252億、普天間は65億、軍用地は、年間借地料の20～30倍で取引されている不動産物件」「沖縄に基地があることでおいしいおもいをする人や組織がたくさん存在する、だから基地はなかなか減らない」「基地の借地料900億、従業員の給料600億、光熱費、上下水道などが税金で支払われている。」¹⁵

また、基地についても個々の米兵に即して語りはじめれば、海兵隊の年間2500回に及ぶ地域活動など、肯定的な像を結ぶことも不可能ではない¹⁶。そうした米軍の地域貢献活動から基地を訪れた高校生は、「基地はなくなって欲しくないです、こんなふうには楽しい思い出も作れるし、いろいろな文化を知った方がよい」、「基地はなんか悪いことばかりに、沖縄の人以外にはおもわれているけれど、アメリカ人にも優しい人も多し、基地があれば交流できるから、なくならなくてもいいかも」と語るようになる¹⁷。

こうした若者たちの意識の変化は、基地をめぐる世論調査にも反映している。沖縄に米軍基地が復帰後も残っていることについて、①日本の安全上必要、②やむをえない、③必要でない、④かえって危険、という4択での質問に対し、1972年の復帰直後は、①+②が26%、③+④が56%で、必要ではないという意見が大きく上回っていたが、復帰後40年の2012年の調査では、①+②が56%、③+④が38%となった¹⁸。基地をめぐる人々の意識は逆転したともいえよう。

沖縄経済といえば、基地、観光、公共事業の3Kと言われてきたが、近年では、基地収入が県民総所得に占める割合は5%程度となり、新たな産業の育成が企図されている。たとえば2012年には、全日空の国際物流事業とヤマト運輸が業務提携を開始している。ヤマト運輸は、羽田に物流ゲート「クロノゲート」を設立し、那覇空港近くには、多機能型物流倉庫「サザンゲート」を配置し、24時間行われる通関、保税倉庫などの機能をフル活用し、様々なビジネスモデルを構築することを目指している¹⁹。もちろん、那覇空港だけでなく、那覇港や中城湾港をも含めて国際物流の拠点とすることが可能か、またそれが沖縄経済にどのような効果をもたらすのかということに

については、今後の課題となる部分も少くない²⁰。

また、観光についていえば、これまでの観光業は本土からの観光客を想定し、本土にはないものを軸に観光業を成立させようとしてきた。しかし近年では、台湾、韓国、中国本土からの観光客が増加しつつある。そうした海外からの観光客にとっては、沖縄＝マリンレジャーではない。彼らにとって沖縄は、むしろ一番身近な「日本」なのであり、沖縄は、日本の文化に触れ、日本の食べ物を食し、日本の商品を買うことが出来る場所という意義を持つ²¹。そうなると沖縄の観光業では、南国的なものではなく、本土（日本）的なものをどれほど提供できるかが重要となる。

沖縄についての記述には、しばしばヤマトという言葉を見いだす。たとえば、「復帰によって、沖縄社会は分断され、沖縄人をして沖縄人とたたかわせるというヤマトの戦略は、全戦線においてほぼ成功的に遂行されています」などである²²。もちろんヤマトという言葉は以前から存在したが、新崎によれば、沖縄返還を挟む数年間で本土をヤマトと呼称する風潮が広がったという²³。ヤマトという言葉は、本土の感覚からは「日本」を意味するようにも思われるが、新崎の指摘のように、むしろ「本土」の置き換えである。次の記述は、そうした微妙な言葉づかいについて触れている。

「「ナイチ」という言葉は、琉球処分後、形式的には沖縄県にされたが、植民地ではないが本国でもない、すなわち外地とされた歴史の痕跡、そして現在も同様の扱いをうける沖縄の位置をあらわしている。しかし、自らそれを用いればその位置づけを承認したような気分になるので私は使わない。また人がいる場所はすべてその人にとって本土だと思うので、「本土」も使わない。」²⁴

ヤマトという言葉と分節されるのは、ウチナーであり、ヤマトという言葉は、ウチナーに対しての抑圧をしばしば含意している。薩摩の侵攻以降、琉球を支配したこと、琉球処分によって軍事的に日本に編入されたこと、人類館事件にみられるように琉球人を差別してきたこと、太平洋戦争末、捨て石にし、多くの住民の犠牲を強いたこと、サンフランシスコ講和条約によって

捨て去られたこと、一方的に基地を押しつけ状況の改善を図らず、金銭で処理しようとしていること等がその理由となる。元沖縄社長座喜味彪好は次のように述べている。

「悲惨な地上戦に巻き込まれ、穴から出てきたら裸にされ、頭から DDT をかけられた。何もかも壊され、口に入るものは何でも食べ、生き延びた。米軍占領下で友人を殺され、女性は乱暴された。そんな沖縄を「ごめんよ」の一言もなく、米国へ売り渡した。基地の過重負担を知らながら復帰前のどさくさに本土からさらに基地を移した。小さな島は軍事基地を詰め込まれ、苦しむ。その上、辺野古に基地を造らせてほしいと言うのか」²⁵

また高良勉は、「琉球民族の一人である私には、日本文化の中に違和を感じ、どうしても理解できない部分がある」とし、「日本文化の中心的な宗教である神道や仏教には違和感が強くなじめ」ないと論じている。そして「日本文化は究極的には天皇制の枠内」にあり、それに対して「琉球文化は、琉球王国時代に国王の支配下にあり、また戦後 27 年間米軍政府支配下にあったため天皇制の枠内に入らない文化体験をもっている」と論じられる。そして高良は、「日本文化が天皇制に呪縛されている限り、単一文化への純化・同化主義が生まれ、その裏返しとしての差別主義が生まれる」と断じる²⁶。あるいは大城立裕は、次のようにヤマトに向けた心情を表現している。

「男女の中等学校生は必死に戦った。日本人として十分に認められたかったからに他ならない。この真情を、昭和天皇やサンフランシスコ平和条約での吉田茂は無視した。その結果、沖縄は、半永久的にアメリカの占領下におかれ、そのおかげで本土だけの日本は国防費の計上を免れて高度成長をなしとげた。祖国復帰運動を佐藤栄作は利用して、米軍基地温存の沖縄県を実現させた。」²⁷

ヤマトに対しての呪詛が強くなるほど、独立論的傾向が増し、保守革新など本土的な政治区分は考慮に値しなくなる。たとえば、革新候補として初代公選主席となり、本土並み復帰を目指して労苦を重ねた屋良朝苗も、天皇崇

拜の保守主義者として非難の対象となる²⁸。そして 2.4 ゼネストが実行されていれば、復帰は別の形となったに違いないとして、「2.4 ゼネストの挫折は、屋良主席に代表され、象徴される復帰思想の敗北であった」と、その政治的判断も批判される²⁹。ただ、独立となると、その過程の思い描き方は多様であり、現実的な運動にはなりにくい。結果として、新崎が指摘しているように、「居酒屋独立論」的なものとなり、眼前の課題の解決に力が注がれにくくなってしまうこともある³⁰。

ウチナーとヤマトを対比してヤマトを抑圧者、植民地主義者と措定すると、ウチナー世界は全面的に肯定されそうだが、その内部では身分差、地域支配なども存在する。まず沖縄本島では、王朝時代士族による支配体制が堅固であった。また男女差別という点では、今だにトートナーなどの問題もある³¹。また本島以外については、薩摩が究極の支配者であったとはいえ、中山王府による支配構造が存在した。たとえば宮古島では、全島民の 1 割ちかくが役人の使役する隷属下層農民である名子（なぐ）であった。全人口の 1 割が名子であったということは、人頭税の収奪のため、農民の暮らしがいかに立ちゆかなかつたかを示している³²。また奄美では、本島からの役人達はそれぞれの職種によって赤い鉢巻きや青い鉢巻きをして平民の前に幅をきかせ、士族が道を通ると平民は石垣の根っこに身体を押しつけ、首を垂れ、手を前に重ねて最敬礼をしたという。

沖縄の神話的世界は、おもろに典型的に残存しているが、それと親和的な超越的世界とのつながりは今日も日常世界の中に色濃く残っている³³。魔は直進するので石敢當を置いてその進行を防ぐという慣習は継続し、街中の随所に石敢當を見ることができる。また魔除けのシーサーも屋根、門などに配置されている。ユタも日常生活に様々に影響する部分があるという。本土と沖縄との厳然とした差異を確認しようとする言説では、こうした沖縄の神話的世界が価値の源泉に求められる場合が少なくない。そこでは本土 = 天皇制、沖縄 = 神話的世界、という構図が描かれる³⁴。

3. 政治の二側面、辺野古

言葉の意味は、他の言葉との関係や文脈で決まる。「政治」という言葉は、交換を軸に成立する「経済」という言葉との分節を意識すれば、主体的、或いは恣意的に価値を分配するよう決定することを意味する。また「法」との分節を意識すれば、決定者が個人的に責任を引き受けること、また状況に応じたアドホックな決定を行うことを意味する。いずれの場合にも共通するのは、何らかの主体的な決定を行うという部分であるが、決定が行われる場合、その決定に直接係わる者たちと、その決定の結果に左右され、影響を受ける被影響者とが存在する。リンカーンの著名な言葉を援用すれば、government by the people (人民が統治を行う) が前者であり、government of the people (人民を統治する) が後者である。つまり民主主義では、2つの側面は、自己統治という理念のもとに現実的融合を果たすべきものと考えられている。本稿では、試みに、決定を行う作為としての政治を「政治A」、決定の被影響体となる側面の政治を「政治B」と置いてみる。

沖縄についての言説が複相的であることについて触れてきたが、「政治A」は、そうした多様な言説が出会う場という意味でもある。そしてその場では、討議、決断などを通じて、ある言説が選択される。たとえば、辺野古移設にも政府中枢の一員として係わった野中広務は、嘉数のタクシー運転手についてのエピソードをたびたび口にしている³⁵。そして「沖縄には非常に熱い思いを持」っているとして³⁶、沖縄の政治家にも、その思いを語っている³⁷。ただ、基地移転受け入れを巡る名護市の住民投票に際しては、反対が過半数を超えても、公には「これを受けて知事や市長が決断することになる。私たちの期待できる条件が整った」³⁸と、投票結果にかかわらず、移設を推進することを明言する。一方、後に「住民の意思として海上基地の受け入れは拒否されてしまった」と書いているように、腹の底では受け入れが住民から拒否されたと理解していた³⁹。野中はこうして矛盾を抱えた幾つかの本音的な事柄を吐露し、また多様な言説に共感を示しつつ、政治的決定として、その1つを選択する。ここに現場での「政治A」の1つのあり方をみることができよう。政治家がしばしば用いる「苦渋の選択」という言葉は、「政治A」に伴う。

また次のように「政治」を、力同士が衝突し、何らかの決着をつける空間と捉える場合もある。こうした政治も、「政治A」の1つのあり方といって

よい。

「政治」とは階級社会の赤裸々な力と力のデーモンが本質的にせめぎ合うところに生ずるものだとするれば、階級的に無色な、地域 = 沖縄共同体の観念は、政治の場で崩壊し、バラバラに解体されざるをえない⁴⁰

ところで、沖縄文学を題材とする時、その代表的存在として山之口獺の詩が取り上げられることが多い。「お国は？と女が言った」ではじまる「会話」は、その代表作である。この「会話」について、「やはりこの詩は広い意味での「政治」をこそ問題にしていると読み取るべきではないか」「沖縄と日本の権力的関係が非日常ではなく、日常まで広がっていることにおいて「政治」を考え」ることができるのではないかと問題提起がなされる⁴¹。ここでは権力的関係、あるいは多様な抑圧関係が、「政治」とおかれている。この「政治」は、「政治 B」を意味している。

辺野古への普天間基地移転問題では、SACO 合意が流れ、沿岸案を軸に検討がすすめられるようになると、調整は、政府、米軍、北部自治体、建設業者の間で行われ、沖縄県、そして県民の殆どは、決定過程から排除され、「政治 B」を強いられた。また、この政治過程（政治 A）では、県民の殆どを決定過程から排除したことと相まって、辺野古移設についてありうるべき多様な言説は、最終的には、安全保障の言説と、経済利益の言説に収斂してゆく。普天間移転問題の具体的な経過を確認してみよう⁴²。

96 年、普天間飛行場の返還について合意に達し、同年 12 月 SACO の最終報告がだされた。これによると、代替飛行場は、海上に建設することを追求し、普天間飛行場のヘリコプター運用機能の殆どをここに置き換え、またその海上施設は、沖縄東海岸沖に建設するものとなっている。こうした動きに対して、名護市では市民も市議会も強く反発した。ただ橋本首相と継続的に会談を重ねてきた大田知事はこれに傍観の立場をとる。そうした中、比嘉名護市長とその市議会与党も、北部振興策と引き換えに海上基地を容認する方向に舵を切ることになり、移設計画は前に進み出す。住民の多くは、こうした動きに強く反発し、市民投票が行われることになる。そして 97 年 12 月

21日に実施された市民投票では、推進派に有利なように質問事項が工夫されたにもかかわらず、条件付き反対を含む反対が53%と過半数を占めた。この結果を受け、基地受け入れ容認であった比嘉市長も、移設断念に傾く。だが比嘉市長は、上京して橋本首相と会談した後、基地受け入れを再度決断し、あわせて市長辞任を表明した⁴³。

こうした流れの中で、大田知事は、それまで立場を明確にしていなかったが、名護市長選挙投票日の直前である98年2月6日、海上基地の受け入れ拒否を表明することになる。大田知事の受け入れ拒否発表2日後の選挙では受け入れ容認派の岸本建男が当選する。そして同98年11月の県知事選挙で、大田知事は敗れ、15年の使用期限付、軍民共用を提案した稲嶺恵一が県知事に当選した。そして、同年12月、稲嶺県知事は、キャンプ・シュワブ水域内名護市辺野古沿岸域を海上施設予定地として受け入れを表明し、また岸本名護市長も受け入れ表明した⁴⁴。ただし、受け入れの条件として、沿岸部ではなく辺野古沖の海上に移設すること、そして「軍民共用、そして15年間で返還して沖縄の財産とする」という事柄が付け加えられた。稲嶺知事は、この条件を外せば受け入れは県民から受け入れられないと考えていた。つまり、これが多様な言説を抱く県民の過半数の同意を得られる限界線であった。

その後、2001年に9.11テロ、そして2003年にイラク戦争が起り、環境は変化する。また海兵隊からの要求もあり、SACOの合意は事実上放棄され、2005年のSCCでは、滑走路はL字型案となり、2006年5月のSCCではV字型となった。この過程での地域との交渉は、政府、地域自治体首長、建設業者の間で行われた。そしてその交渉過程は、多様な言説を理解する素地を欠くものたちが、日米安保の言説をゴリ押しして、地域経済の言説を突き押しするという性質のものであり、殆どの県民はそこから、情報の点でも、言説的にも、また関与という点でも排除されていた。結果として限界線を大きく超えた案で周辺自治体の合意がとりつけられ、またかつて岸本市長が志向した「コンパクトな基地」からはほど遠い移設案ができあがることになった。そして仲井真知事時代に県の合意も取り付けられることになる。

米軍海兵隊基地を置く条件として、海兵隊を構成する陸上部隊、航空部隊、輸送部隊の3つが近接した地域に存在し、連携した訓練が可能であることと

いう条件がある。そのため普天間飛行場だけを遠隔地に移転するという選択肢は存在しない。その一方、その3つが近接しているならば、それが置かれるのは、沖縄でなくてもさしつかえない。だが、その3つを同時に受け入れる地域を日本で沖縄以外に見いだすことは容易ではない。そこで、現在、その3つが存在する沖縄が普天間移転の候補地となる。

しかし、それは沖縄県民からすれば、余りに不公平であり、差別であるとも映る。従って、沖縄県民の多くは、これに同意することはできない。「辺野古に新しい基地が出来れば、沖縄の基地が減ることにならないばかりか、沖縄がはじめて承認した基地が建設されることになり」「しかも大型船が寄港できる護岸や弾薬搭載エリア、長さ 1800 メートルの 2 本の V 字滑走路など普天間にはない設備が整備され、基地機能が強化される形で将来もずっと固定されることになる」⁴⁵ からでもある。確かに、すでに専用基地の 70% 以上を受けて入れている沖縄が、更に新たな基地を引き受けさせられるとなれば、差別であると告発されても反論できないだろう。

4. 感覚の違い、意識の隔たり

「政治 A」は多様な言説が出会う場であったが、そこに現れるべき言説が限定、排除されるならば、その場はあるべき姿を見失い歪められる。また、ある事象が期待された言説で語られない時、人はそれを語る人との間に意識のずれを感じる。先に触れた辺野古移設では、多様な言説から理解されるべき基地問題が、安全保障と地域経済という限定された言説で捉えられる傾向が顕著であった。その結果、本土の少くない人たちは、地元の不利益はどの程度の金銭的保障で代替できるのかという問題として移設問題を理解するようになる⁴⁶。こうして、沖縄の人々と本土の人々の間に意識のずれが生じる。そうした「ずれ」があるならば、沖縄は、「政治 A」から決定関与という点で排除されるばかりでなく、決定対象となる事象の見え方がそもそも異なっているという点でも疎外されていることになる。

こうした意識のずれは、すでに半世紀以上前となる 1965 年に刊行された『沖縄問題 20 年』で新崎盛輝により、「感覚的な食い違い」「感覚のずれ」と

表現されている⁴⁷。そこでとりあげられているのは、交通信号を無視した軍用トラックが子どもをひき殺した事件について、沖縄の新聞が、これを連日、執拗に報道していることを本土から訪れた評論家が、異様に感じるという事例である。新崎は、「沖縄の新聞が連日追求したのは、交通事故ではなく、人権無視の思想である」「沖縄と本土の感覚のずれが示されているように思われる」と指摘した⁴⁸。

こうした本土と沖縄の間の感覚のずれ、あるいは言説の違いは、一貫して継続してきたといってよい。その一例を2004年の普天間基地所属ヘリコプターの沖縄国際大学構内墜落事件にみることができる。この事件が起きた8月13日、NHK夜7時のニュースのトップは、あるプロ野球球団のオーナーが辞任したことであり、次に取り上げられたのが、お盆の帰省ラッシュ、そしてアテネオリンピック情報であった。墜落事件が取り上げられたのは6番目であり、その長さも30秒程度のものであった⁴⁹。そして時の小泉首相も、南米出張から急遽帰国した当時の稲嶺知事の面会を、夏休みを理由に拒絶したという。墜落先の大学で人が出ていないこと、搭乗員にも死者が出ていないこと、などを考慮すれば、墜落事件は、軽度な事故に分類されると判断されたのだろう。稲嶺はこのことを「東京と沖縄の温度差」と表現している⁵⁰。日々飛行場の騒音に悩まされ、米軍関連の事故が継続的に発生し、また宮森小の事故などの記憶が生々しく残っている地域と、そうした環境にない地域での意識の違いに起因するとすることもできる。

ただ、もし米軍ヘリコプターの墜落場所が、厚木基地周辺の小学校校庭やマンション敷地内であった場合も、生徒や住民に被害はなく、搭乗員に死者がなければ、同じように扱われたのか想像してみてもよいだろう。1977年には、横浜市緑区(現青葉区)に厚木基地所属のファントム機が墜落し、幼い子ども2人とその母親の命が奪われている⁵¹。頻度は沖縄とはくらべものにならないとしても、首都圏の米軍基地周辺では、沖縄と共通した基地問題を抱えている。そのことを考えると、墜落場所が首都圏であれば、7時のニュースは、沖縄の場合と同じようには扱わなかった可能性が高いように思われる⁵²。だとすれば、こうした意識の違いは、米軍基地を巡り積み重ねられてきた経験の違いだけではなく、別の事柄にも起因しているに違いない。それは、空間的隔たり、多様な言説の不理解、そして根底的にはそれを超え

るべき同胞意識の欠如である。

空間的隔たり、多様な言説の不理解、同胞意識の欠如という点で最も象徴的なのは、サンフランシスコ講和条約であろう。この条約において、日本政府は、沖縄、小笠原などの島を米軍の統治に委ね、自分たちだけ独立することを選択した。この選択に際して、何らかの葛藤は存在しなかったのだろうか⁵³。たとえば、仮にアメリカの侵攻戦略が四国を対象とし、数ヶ月に及ぶ戦闘の末、四国が占領され、その後日本が降伏したとした時、四国のみを信託統治に置くという内容が記された講和条約に、国民の多くは同意するだろうか。沖縄戦の際、海軍の大田司令官は、海軍次官宛て最後の電文で、沖縄県民が過酷な状況の中で国のために身を挺した働きをしたかを述べ、「沖縄県民斯克戦ヘリ 県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」と結んだ⁵⁴。とはいえ、戦後、期待された高配は与えられなかった。戦中戦後の労苦はどの日本国民も同じであると堂々と述べる政治家は、本土が独立を果たした 52 年以降、20 年に渡り、沖縄県民が米軍の支配下に置かれ憲法的保障のないままに暮らすことを余儀なくされた事実をどのように受け止めているのだろうか。

1963 年に岩波新書として著された『沖縄』は冒頭に以下のように記している。

「祖国防衛のためにはらった沖縄県民の犠牲は、他のどの日本人にも劣らなかったであろう。ところが、日本政府は平和条約によってその沖縄をアメリカにうりわたしたとき、沖縄県民にたいしてはひとことの挨拶も送らなかった。それは挨拶のしようがなかったというよりは、むしろその必要を感じていなかったといったほうがよさそうである。1952 年に対日平和条約が発効したとき、日本人のなかの果たしてどれくらいの人がこの条約によって沖縄がどういうことになったかを正確に知っていただろうか。」

⁵⁵

5. 新川明、目取真俊

複相的な言説を前に選択することが政治だとしても、どのような基準をもって選択を行うのか定めることは容易ではない。それぞれの言説を等しく扱おうとすればするほど、しっかりとした軸を見失いかねない。結果として、たとえば「特別措置にどっぷりつかった日常」「心情的差別告発論」⁵⁶に陥ることもあろう。そういった陥穽を免れている思想として、是非の評価はおき、新川明と目取真俊の思想を取り上げてみたい。

新川明は、学生時代、60年代の学生運動の影響を受けつつ、『琉大文学』を中心となって支えた。当時の学生運動は、東西対立の中にあつて社会主義に加担し、その延長上に理想的社会を構想する。そこでは社会主義体制が確立されれば、諸矛盾は一気に解決されるという論法がしばしば用いられる。たとえば、本土の人民（前衛党）と連帯し、反帝反独占の戦いに勝利すれば、沖縄の解放が勝ちとれるといった類いである。そうした中であつて、新川自身の言葉に従えば、第一に島尾敏雄との出会い、第二に国場事件、第三に60年安保との接触により、新川の「反復帰」思想へと生成してゆく過程が始まる⁵⁷。

やや話はそれるが、沖縄選出自民党議員による「沖縄保守宣言」という書がある⁵⁸。この書名に接して思うのは、沖縄自民党を沖縄における「保守」とすることがどこまで適切なのかということである⁵⁹。成立時の沖縄自民党は、米軍との協調関係を模索していたのであり、ヤマト的価値を押しつけようとする政党ではなかった⁶⁰。「保守」という言葉自体、曖昧なものであるが、そこには伝統的な価値の保全が一般には含まれる。自民党が保全しようとする伝統的な価値は、個々の地域に存在する伝統的文化価値では必ずしもなく、沖縄との関係でいえば、むしろヤマト的価値である。それと同じ関係が人民党についてもあてはまる。人民党の背後に日本共産党が存在し、その意志を組織全体に浸透させようとするとき、人民党はヤマト的な革新理念を強要されることになる。新川明が、国場事件で感じ取ったのは、そうしたヤマト的な権力性であり、それに従う限り真の解放はないということであった。

また安保闘争も、ヤマトの政治的解放の闘争であり、その延長上に、沖縄の解放はないということ、実感として感じさせるものであった。では、何を政治的価値の準拠点とするのか。それを新川に提示したのは、琉球王国ではなく、ヤポネシアという島尾の理念であった⁶¹。

反復帰論は、復帰に反対するということであり、復帰しないということは、現実的には旧来の米軍支配のままか、あるいは独立かのいずれかを意味する。その際、米軍支配下の無憲法状態を肯定しないなら、独立が選択されることになる。従って、反復帰論は独立論ではないかと、一般には考えられがちである。そして新川も究極の独立を志向している。しかし新川は、「反復帰論は「独立」論ではない」と言い切る⁶²。そして次のように論じる。

「復帰思想とは、沖縄人が自らすすんで国家に身を投じてゆくという日本国民化志向の精神的な病理を指す言葉であり」、「私の言う反復帰とはしばしば「反国家」と同義語であるし、「反復帰」論者とはすなわち「国民」になることを拒む「非国民」という語を体現する者として語られている。」⁶³

つまり反復帰の立場とは、思想の左右を問わず存在する権力的統制に常に異議を唱え、自分たちの主体性、自由を保全しようとする姿勢である。そのため、今この場で具体的な統治を伴う仕組みを構成することには背を向けることになる。現状で、そうした仕組みを作れば、現実との妥協、苦渋の選択を様々に強いられ、必ず統制、不自由をうむからである⁶⁴。「政治 A」で人は具体的な事柄と係わり、具体的な事柄への責任を問われる。従って、反復帰の理念は、「政治 A」と係わることを拒否する態度だともいえ、やや無責任な印象をもたらさないではない。とはいえ、反復帰の理念は、現実へのコミットメントを回避することで、思想としての純粋性を保つことができる。その点で、反復帰の理念は、政治思想で超越性が果たす最終価値担保機能を代替しているとも考えられる。

確かに新川は、社会主義思想を起点として思想形成を遂げた。その限りにおいて唯物論的に傾向をとどめ、超越的なものを想定し、それを価値の基準とする側面は希薄である。だが、反復帰という否定の論理は、具体化しない、

現実に理想を読み込まないという点で、現実との断絶性を保ち、その点で超越的なものに代替する機能をはたしていたのである。

これに対して、目取真俊は、死者の声に耳を傾け、それに超越的な価値の世界を見いだそうとする。そうした死者の声は、現世の日常に具体的な形で現れることはなく、それに傾聴しようとする者の想像の空間にのみ反響する。そしてそれは、日常に具体化されない以上、現世の幸福を構成する諸価値と同一地平で比較考量されることはなく、圧倒的な価値を持つ。その死者とは、沖縄戦で灼熱の砲弾片に引き裂かれて斃れ死んだ家族であり、あるいはガマで口を閉ざされ窒息死させられた幼児であり、また日本兵に殺害された市民たちであり、戦後、米兵に蹂躪された弱い住民たちである。北部の森で水や食べ物を求めてさまよった兵達は、「水滴」で水を飲みにくる死者となり、鉄血勤皇隊としてかり出された少年は、夜の街に現れる首のない伝令兵となる。現世を生きる人間は、具体的身体を維持すべく現世の時間を刻んで生きている。それに対して死者達は、もはや身体を維持する必要もなく、現世の時を刻むこともなく、超越的空間に存在する。生者がそうした超越的空間とつながりを保つことができるのは、生者が持つ魂の働きによる。そのため、目取真にとり、魂は、「面影と連れて」「魂込め」などで描かれているように、極めて重要な意味を持つものとなる。そうした目取真の世界観は、以下に簡潔に示されている。

「「いやし」という言葉が流行語となる時代に、決して癒やし得ない体験を抱えて口をつぐんだり、非論理的なつぶやきや叫びによってしか表現できなかつた混乱した感情を、その混乱のまま受け止め、その意味するものを粘り強く考えること、そして絶対的な沈黙の彼方に居る死者の、終に語り得なかつた体験を考えること。未来を売り物にした華々しい言葉が飛び交えば飛び交うほど、そういう作業を大切にしたいと思う。」⁶⁵

目取真の超越的世界と、新川の反復帰は、何か具体的な構築物を、現世で直ちに実現しようとはしていない点で類似性を持つ。ただし、新川の反復帰は、先に記したとおり、内面的な構成物を志向するため、具体的な運動論に

は結びつきにくい。それに対して目取真の場合、死者の声は、生者をただ導くものであって、生者が新たに現実の中に構成しようとするものではない。そのため目取真は現実への眼差しを失わず、運動に結びつくことができる。そして結びついた場合の運動は、現実との妥協を許さず、過激ともいえる性格を帯びる⁶⁶。現実への積極的関与をためらわない目取真は、辺野古の問題についても、積極的に関与し、カヌーを漕いで阻止行動に参加している。

このように「絶対的な沈黙の彼方に居る死者の、終に語り得なかった体験を考える」ということこそ、目取真の諸作品に共通した点であり、その行動を支える土台となっている。そのため、目取真の思想には、多面的に諸価値を考量し、落としどころを探るといった姿勢はない。もちろん、多面的な言説の存在を完全に無視しているわけではない。たとえば『虹の鳥』には、軍用地料で生活する父、勤労精神に支えられた姉など、多様な生活上の価値が示されている。しかし、目取真は、価値のバランスをとる姿勢を、「苦渋の選択」や「現実的対応」などと自己合理化しながら辺野古への基地建設がもたらす利権に群が⁶⁷るものとし、「自立心のない卑屈な精神」と厳しく断罪する⁶⁸。そしてその矛先は革新といわれる側にも向けられる。彼らも、死者たちの声を聞かず、安易に流れるものだからである。かつて翁長雄志は、沖縄保守が基地を甘受してきたことに係わり、「革新は異民族支配のなかで「人権の戦い」をしていた、それに対して保守は「生活の戦い」していた、どちらも正しい」と語ったという⁶⁹。しかし、目取真にはそうした議論は全く通用せず、「人権の戦い」さえも、死者の超越的な声の前には、自己利益の一種に過ぎず、超克すべきものと見做されるに違いない。目取真は、「反対運動の側もまた、やれ「命どう宝」だの「非武の思想」だのと戦後民主主義のお行儀のいい運動を褒めそやされ⁷⁰」という。そして目取真は、「ウチナンチュはどうしてもこうも卑屈な民に成り下がってしまったのだろうか」と嘆息し、「抵抗している振りをしながら、しょせんは言いなりになるしかない卑屈さと欺瞞、政治的に敗北する以前に精神的に敗北」しているのだと喝破する。

「この沖縄は政治も文化も貧しいシマだ」「老女たちの祈りは届かず、海も山も金儲けの対象となって荒れ、腑抜けた男達が泡盛とスロットマシン

でだらしく過ごし、甘ったれた若者が58号線の椰子の木に激突して果てる。軍用地料という不労所得の旨味を味わい、自立しようという気概もないこの沖縄の貧しさ。この貧しさを直視する所から小説を書いてゆきたい⁷¹」。

6. おわりに (沖縄からみえるもの、グローバル化と沖縄)

本稿冒頭に示したように、国場幸太郎は、沖縄を見ることで日本を見る目がするどくなると語った。ここまで沖縄について触れてみて、日本について何がわかるのだろうか。

第一に、首都圏を中心とした日本国内の共感力の限界を挙げることができる。過去に遡れば、51年の講和条約締結で沖縄を切り捨て、またその後も沖縄を日本の一部ではないかのように日常的に思い込んできた。この状況は、2004年の沖国大ヘリコプター墜落事件でも示されたように、世紀末の沖縄ブームを経た今世紀に入っても継続している。県知事が南米出張を切り上げ、慌てて帰国する事件も、首都の公共放送にはプロ野球チームの騒動、帰省ラッシュほどには関心を惹かない事柄であった。

第二に、沖縄に係わる事象を見てゆくと、本稿で「政治A」とした、共同で議論し決定するという民主主義的なプロセスの意義が、日本では十分に確立していないことが見えてくる。そして第三に、戦後日本の平和と経済的発展が、日米安保体制を土台に成立したとするならば、安保体制の軍事的負担の極めて大きい部分が沖縄により担われてきた以上、その平和と繁栄は沖縄の犠牲のもとに成立したことは否定できないということがある。このことは以前から、新川明など多くの論者が指摘してきたことである。もちろん度重なる地域振興策、あるいは多額の軍用地料など、犠牲への保障が継続的に行われてはきた。しかし、その犠牲が金銭によって代替できるとする論理は、多様な言説を単純化し、安全保障と地域経済という限定された言説空間を設定してはじめて成り立つ。

20世紀末から進展してきたグローバル化は、主権国家同士の障壁が目に

見えて低くなり、人、物、金銭が以前に較べて自由に行き来できるようになったことが中心的な意味であり、そこから派生する事柄として、EU 等の地域結合、EPA 等の経済連携の動きが加速した。結果として、国家の意味、諸個人と国家の関係性は変化した。

たとえばユーゴスラビアは、セルビア、クロアチアなどを対立軸として、激しく血を流し、いくつかの国家に分裂したが、紛争が沈静化した後、それぞれの国家は、EU というより広い統合に加わろうとしている。そうすると、血を流して国家を融解させることの意味がどれほどあったのか問われることになるだろう。

主権国家は、様々な福祉機能など多面的な側面を持つが、歴史的な展開を追えば、軍事力を中心軸に発展してきたことは否定できない。グローバル化の進展は、そうした軍事的なものの意味を変化させる可能性を持つ。沖縄が抱える最大の問題は基地問題である。グローバル化が軍事的な事柄の意味を変化させるなら、グローバル化の進展とともに、基地問題の環境も変化する可能性を孕んでいる。また沖縄が構想するように、グローバル化の進展の中で、沖縄が東アジアと南アジアをつなぐ新たな地位を獲得する未来も垣間見える。

ただ、今日は、トランプ政治、イギリスの EU 離脱、先進国でのポピュリズムの台頭など、グローバル化とは逆行する動きも目立っている。こうしたことの根底には、経済拡大を軸としたグローバル化が著しい格差の拡大と社会不安を生み、その解消の担い手として国家が期待されているということがある。またグローバル化の進展の中で、軍事力の意義が低下すれば、軍事力の担い手が、たとえば湾岸戦争にみられたように、自らの存在意義を示すために軍事的冒険主義に走る危険もある。沖縄の新しい未来への道は平坦ではない。

かつて新川明は、「日本「本土」の人間はおしなべて「ヤマトンチュ」であり、その人々が住む国土は「ヤマトウ」である。そして沖縄に住む私たちは、あくまでも「ウチナーンチュ」である」「日本人である前に、頑固に沖縄人であることを自覚するこの意識構造は、日本「本土」ではどの地方にいてもおそらくみることができない現象だと考えられる」と述べた⁷²。

しかし、時代の経過とともに人々の意識も変化する。若い人たちの意識について、稲嶺は、「特に視覚、テレビの影響が非常に大きいのですが、若い人たちは文化的に全く本土化していると言えるでしょう」「ウチナーンチュ的な意識が今の若い人たちにはほとんどなくなっている」「彼らは日本の中の沖縄県人であるという意識です」と述べている⁷³。また先に触れたように、基地を巡る意識も変化している。

目取真が依拠する死者の声は、具体的な個々の人々によってしか伝えることはできない。これまでその伝達役はウチナーンチュ（沖縄生まれ育ち）に限定されてきた。若者の意識が変化し、ウチナーンチュ意識が希薄化すれば死者の声も現実には忘れ去られてゆかざるをえない。だとすれば、その伝え手を沖縄生まれ育ちに限定することはどこまで現実的なのだろうか。沖縄に生まれたからにはウチナーンチュなのだとして、ウチナーンチュ意識を再教育し、方言札ではなく、「ヤマト言葉札」なりを作って島言葉を強制するならば、それは別の抑圧構造を作り出すことになる。沖縄戦も、52年以降の米軍支配も経験したことがなく、それを経験した人とのつながりもない人々が増えてゆくとき、それを語り伝える役割を沖縄生まれ育ちに限定する必然性は乏しいように思われる。

また、ヤマトによる植民地化と抑圧を告発しつつ、琉球文化への回帰を希求する論者も少なくない。過去に存在した琉球文化が、その支配構造はさておき、美しいものであったとしても、それはその時代の生活諸条件と諸関連の中で成立していたものであり、その条件、関連がもはや存在しない現代において再生させることは不可能である。時空を超越した琉球的アイデアが実在すると信じて、それを具現化しようとすれば、現在の生活諸条件と諸関連の中で形にあらわす以外にはない。そしてそれを実現すべく、仮に、沖縄の人の殆ど全てがウチナーグチを話し、ヤマト言葉を忘れたとしても、琉球王国がかつての美しい姿をまとめて復活するわけではない。それは渡辺京二が江戸について語ったのと同様である⁷⁴。自立した沖縄の文化を確立するためには、古い琉球文化の再現ではなく、新しい独自の文化の創造を目指す以外にはないように思われる。

【注】

- *1 例えば次のような指摘がある。「沖縄を認識し、沖縄についての情報を集め、沖縄の文化を体得するのは、沖縄を支配し続けてきた本土人なのである。沖縄に関する認識、情報、知識、文化の収集は、沖縄支配のために流用される」「沖縄の理解者が「沖縄オリエンタリズム」の担い手になり、沖縄支配を固定化してゆく。」(松島泰勝「沖縄は日本の植民地である」『沖縄問題とは何か』2011年、藤原書店、41頁)
- *2 国場幸太郎『沖縄の歩み』(岩波現代文庫、2019年)。この部分は、新崎盛輝も『私の沖縄現代史』(岩波現代文庫、2017年)で引用している(245頁)。
- *3 沖縄を巡る言説を単純に左右、保守革新などの単一のスケール上に並べることは無理があるが、反復帰、独立などを最も急進的、反ヤマト的とすれば、その代表の一人に新川明をあげることができよう。この新川が、反復帰にたどり着いた契機の一つとしてあげているのが、国場幸太郎の人民党追放事件である。新川は、国場について「物腰の柔らかい学究肌の国場の人柄は私たちを強く引きつけ」「沖縄における前衛党の“希望の星”とも言える存在として畏敬される人物」と評している。(新川明『沖縄・統合と反逆』筑摩書房、2000年、78頁)なお、国場幸太郎の追放事件については、新川明「いわゆる「国場事件」をめぐって」を参照(森宣雄、鳥山淳編『「島ぐるみ闘争」はどう準備されたか」不二出版、2013年)。
- *4 大田昌秀『醜い日本人』サイマル出版会、1969年、14頁。
- *5 多田治『沖縄イメージの誕生』東洋経済新聞社、2004年。
- *6 The BOOMが「島唄」をリリースしたのが1992年、森高千里が「私の夏」で沖縄の海を歌ったのは1993年であった。1995年には安室奈美恵がソロデビューを果たし、翌1996年にはSPEEDがデビューする。「ナヴィの恋」「ちゅらさん」から沖縄サミットに至る前に、沖縄イメージ的なものは存在していた。
- *7 切通理作『怪獣使いと少年』宝島社文庫、2000年。
- *8 山田輝子『ウルトラマンを創った男』朝日文庫、1997年。上原正三『金城哲夫 ウルトラマン島唄』筑摩書房、1999年。
- *9 大江健三郎『沖縄ノート』岩波新書、1970年、5頁。また瀬長亀治郎『沖

縄からの報告』(岩波新書、1959年)は、「この村は貧しさでは沖縄屈指であり、沖縄の農家ではおつゆのだしに煮干しを使うのが普通であるが、この村では殆どがだしを入れない。野菜もつくりはするが糸満町へ売りに出すので、うちではよもぎなど混入してやっといのちをつないでいる」と報告している(162頁)。

- *10 森秀人『沖縄怨歌・崩壊への出発』現代思潮社、1971年、34頁。
- *11 佐野真一『沖縄 誰にも書かれなかった戦後史』集英社インターナショナル、2008年、591頁。
- *12 大田、新川、稲嶺、新崎『沖縄の自立と日本』岩波書店、2013年、88頁。
この部分の記述は、同書新崎による。
- *13 真栄城守定、牧野浩隆、高良倉吉『沖縄の自己検証』ひるぎ社、1998年、30頁。「基地という戦争のための拠点は道徳的理念的に歓迎できない性格を持っていたのかもしれないが、それは一応おくとして、基地という巨大な磁石のようなものができたために沖縄社会が大きく生まれ変わったというか、作り替えられてしまった。その状況が五十年も続いたというのが今の我々の社会であるということです」(32頁)。
- *14 真栄城、牧野、高良前掲書、32頁。
- *15 大久保潤『幻想の島 沖縄』日本経済新聞社、2009年、145頁、162頁。
- *16 松原『反骨』朝日新聞出版、2016年、180頁。
- *17 松原前掲書 208頁。
- *18 河野啓、小林利行「復帰40年の沖縄と安全保障」『放送研究と調査』2012年7月。
- *19 安里昌利『未来経済都市沖縄』日本経済新聞、2018年、140頁。
- *20 屋嘉宗彦『沖縄自立の経済学』七つ森書館、2016年、73頁。
- *21 安里前掲書、145頁。
- *22 仲宗根勇『沖縄差別と戦う』未来社、2014年、157頁。
- *23 大田、新川、稲嶺、新崎前掲書、92頁。
- *24 知念ウシ『シランフーナーの暴力』未来社、2013年、109頁。
- *25 『沖縄を語る1』沖縄タイムズ社、2016年、92頁。
- *26 高良勉『魂振り』未来社、2011年、230頁。
- *27 『沖縄問題とは何か』藤原書店、14頁。ただ、このように書く大城が、ど

うして叙勲を受けたのかは疑問なしとはできない。ヤマトの誘惑はかくも甘いということかもしれない。大城立裕については以下も参照。新川明「大城立裕論ノート」(『沖繩 統合と反逆』所収)。

- *28 目取真俊は次のように記している。「屋良朝苗氏自身が、戦後も天皇を崇拜していたのですから、沖繩の教師たちの戦争への反省も、天皇制の批判には届いていなかった。自らの戦争責任、加害責任を直視し、問い続けることはつらく精神的に重いことです。しかしそれはいまからでもやらなければならないと思います。」(目取真俊『沖繩「戦後」ゼロ年』NHK 出版、2005 年、51 頁)
- *29 新崎盛輝『私の沖繩現代史』岩波現代文庫、2017 年、204 頁。『沖繩を語る 1』沖繩タイムズ社、2016 年、222 頁。
- *30 「一杯飲んでる時には悲憤慷慨して「もうこうなれば独立だ」と気炎をあげながら、酔いが醒めれば軍事基地との共存を促すための効率補助政策をはじめとする特別措置にどっぷりつかった日常に舞い戻ってしまう状態」と新崎は説明している(新崎盛輝『沖繩現代史』182 頁)。これについての新崎自身のコメントは、大田、新川、稲嶺、新崎前掲書、191 頁。
- *31 琉球新報社編『トートーメー考』1980 年。
- *32 谷川健一『沖繩』講談社学術文庫、1996 年、136、138 頁。
- *33 沖繩文学で様々な表現化されるが、漫画でも比嘉漣『マブイ』などの作品で描かれている。
- *34 本土で抱かれる超越的世界には、仏教的なもの、儒学的なもの等、多様である。確かに明治国家体制のもとで、これらに天皇制に収斂させるような力が働いたことは否定できない。とはいえ、それらは半世紀ほどの過程であり、それ以前の豊かな思想世界を統合するものではなかった。
- *35 このエピソードに触れた発言として、最も知られているのは 97 年衆議院本会議での発言だろう(野中広務『老兵は死なず』文春文庫、2005 年、29 頁)。
- *36 『聞き書野中広務回顧録』岩波現代文庫、2018 年、334 頁。
- *37 翁長雄志『戦う民意』角川書店、2015 年、53 頁。
- *38 新崎(2005) 186 頁。
- *39 野中(2005) 31 頁。

- *40 仲宗根勇『沖縄少数派』三一書房、1981年、51頁。
- *41 藤澤健一編『沖縄問いを立てる-6 反復帰と反国家』社会評論社、2008年、13頁。
- *42 辺野古移設についての経緯は以下を参照。渡辺豪『「アメとムチ」の構図』（沖縄タイムズ社、2008年）、森本敏『普天間の謎』（海竜社、2010年）、小川和久『普天間問題』（ビジネス社、2010年）、新崎盛輝『沖縄現代史新版』（岩波新書、2005年）。
- *43 橋本比嘉会談については、野中広務（2005）31頁に、新崎の紹介とはやや異なるニュアンスで言及されている。
- *44 稲嶺恵一『稲嶺恵一回顧録』琉球新報社、2011年、156～158頁。
- *45 翁長雄志（2015）、25頁。
- *46 あるいは辺野古問題を法的手続きの正当性の問題としてのみ捉える場合なども、言説限定の傾向を持つ。
- *47 中野好夫、新崎盛輝『沖縄問題 20年』岩波新書、1965年、203頁、207頁。
- *48 中野、新崎前掲書、207頁。
- *49 七沢潔「記録された沖縄の本土復帰」『放送メディア研究』2011年、71～72頁。
- *50 稲嶺恵一『稲嶺恵一回顧録 我以外皆我が師』琉球新報社、2011年、314頁。
- *51 河口栄二『米軍機墜落事故』朝日新聞社、1981年。脱出した操縦士がパラシュートで降下した横浜市緑区（当時）鴨志田と米軍機が墜落して炎上した緑区（当時）荏田の2地点の中間程のところに本学園は立地している。20年ほど前に本学に赴任した時、戦闘機やヘリコプター等の騒音を頻繁に耳にした印象が強く残っている。
- *52 目取真俊も「もし首都圏の大学に米軍ヘリが墜落していたら、大手メディアの反応はまったく違ったはずだ。沖縄県民の生命が危険にさらされた大事故も、本土メディアや市民にとっては巨人のオーナーの辞任以下の関心しかありはしないのだ」と書きとめている。（目取真俊『沖縄地を読む時を見る』世織書房、2006年、172頁）
- *53 後藤田正晴は、翁長雄志に「沖縄の県民に申し訳なくて」と語ったという（翁長雄志〔2015〕、54頁）。後藤田の脳裡には、沖縄を捨てて自分たちの独立という利益を優先したことへの悔悟の念があったとも想像できる。た

だ、いまとなつては、そうした思いを吐露できる政治家を見いだすことは難しい。

- *54 『戦史叢書 沖縄方面海軍作戦』朝雲新聞社、1968 年、668 頁。
- *55 比嘉、霜田、新里『沖縄』岩波新書、1963 年、4 頁。
- *56 新崎 (2005) 182 頁。
- *57 新川明『沖縄・統合と反逆』筑摩書房、2000 年、77 頁。
- *58 國場幸之助『「沖縄保守」宣言』ケイアンドケイプレス、2019 年。
- *59 「徹底的に沖縄の土地と人々に固執した立ち位置から世界を見る「保守性」を沖縄の保守思想と捉える場合もある (佐藤優『佐藤優の沖縄評論』光文社知恵の森文庫、2014 年、187 頁)。
- *60 仲本安一は、次のように述べている。「当時保守というのは親米的で、いわゆる段階的な日本復帰論。親米だから復帰しなくてよいというのではなく、保守も革新も一応皆復帰ですよ。だが方法論が違う。革新は一日も早い祖国復帰だと、ところが保守の方はアメリカと仲良くし、彼らから援助も引き出しながら、段階的に日本に復帰すればよいという立場でした。」(河野、平良編『対話沖縄の戦後』吉田書店、2017 年、72 頁)
- *61 新川は、石垣島駐在時に八重山の島々について『新南島風土記』を著し、琉球王朝時代の本島と離島との支配関係についても確認している。単純な琉球王国憧憬意識に基づく独立論とは一線を画す姿勢はそこから生まれる。琉球王国に代替する理念がヤポネシアであった。
- *62 新川 (2000)、69 頁。
- *63 新川 (2000)、69 頁～72 頁。
- *64 このことについて小熊は、「もともと彼の反復帰論は、政治的運動というよりも、アイデンティティをめぐる思想的営為だった」とし、「このような哲学的議論は、大衆運動と政党を組織することがすなわち政治であるという立場からは、なんの意味もないものに見えただろう」と論じている (小熊英二『日本人の境界』新曜社、1998 年、623 頁)。
- *65 目取真俊『沖縄／草の声、根の意志』世織書房、2001 年、31 頁。
- *66 その過激さは、たとえば「今オキナワに必要なのは、数千人のデモでもなければ、数万人の集会でもなく、一人のアメリカ人の幼児の死なのだ」という表現に至る (目取真 [2001] 288 頁)。これは 1999 年の朝日新聞に掲

載された「希望」という題名の短編小説の一節であり、このイメージは『虹の鳥』にも用いられている (目取真俊『虹の鳥』〔新装版〕影書房、2017年、191頁)。

*67 目取真 (2001)、200頁。

*68 「地域振興という美辞麗句の裏で、自分のふとこころにいくら入るか計算している連中はごろごろしている。自分の頭を踏みつける奴の足の裏をなめ、投げられた飴をしゃぶりたい奴はしゃぶるがいい」 (目取真 [2001]、32頁)。

*69 松原前掲書、82頁。

*70 目取真 (2001)、194頁。

*71 目取真 (2001)、265頁。

*72 新川明『反国家の兇区』現代評論社、1971年、7頁。

*73 大田、新川、新崎、稲嶺前掲書、151頁。

*74 渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社ライブラリー、2005年。

(ます・のぶお 桐蔭横浜大学法学部教授)